四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報16

雁屋遺跡発掘調査概要・I

―四條畷市雁屋所在―

1984・3

四條畷市教育委員会

四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報16

雁屋遺跡発掘調査概要・Ⅰ

――四條畷市雁屋所在――

1984・3

四條畷市教育委員会

はしがき

この報告書は日本道路公団大阪建設局より委託を受け、昭和58年5月に実施した日本道路公団四條畷職員宿舎建設にかゝる緊急発掘調査の概要報告である。

当遺跡は四條畷市西南部に位置し、標高5.5mの地点にある。往古には河内湾がこの付近まで深く入りこんでおり、その後河内湖となり、その名残りの深野池は、江戸時代中頃まで存在し雁屋浜と呼ばれた船つき場もこの附近に所在していた。

調査の結果、表土より約3m下から弥生時代中期の土器棺が出土した。弥生時代第Ⅲ様式の甕と鉢を転用したこの土器棺は、ほゞ完全な姿で出土している。また約30cmの溝状遺構上面より弥生時代前期初頭に位置する大壺が出土した。

これらの発見は、河内湖東北部に接する弥生時代遺跡分布に貴重な証拠を示したものであり、特に前期初頭の大壺は、今後の学術資料として重視されることであろうと思われる。

調査に当っては、大阪府教育委員会ならびに日本道路公団大阪建設局をはじめ関係各位のご指導、ご協力をいたゞき、こゝに深甚なる謝意を表する次第である。

四條畷市教育委員会

教育長　櫻井敬夫

例　　言

1．本書は、四條畷市教育委員会が、昭和58年度に日本道路公団四條畷職員宿舎建築予定に係る埋蔵文化財発掘調査として、日本道路公団大阪建設局より委託を受けて実施した四條畷市雁屋北町370番－1，370番－2に所在する雁屋遺跡発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、昭和58年5月2日に着手し同年7月8日まで発掘作業を行ない、その後、昭和59年3月31日まで整理作業を行った。

3．発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課技師・野島　稔を担当者とし、調査補助員として、堂元栄一郎、川本　英があたった。

　出土遺物の整理・実測などについては、野島　稔、川本　英、前田　暢、林　清文、吉田武司、川本三智子、秋山敬子、上野和歌子、岡田桂子、泉節子、西尾牧子、南野智子、白石由香があたった。

4．本書の執筆は、野島　稔が行った。

5．発掘調査の進行・報告書作成などについては、同志社大学・瀬川芳則、大阪府教育委員会・井藤　徹・堀江門也、東大阪市教育委員会・下村晴文・阿部嗣治、大阪市立博物館・文珠省三、寝屋川市教育委員会・塩山則之、田原本町教育委員会・藤田三郎、(財)枚方市文化財研究調査会・宇治田和生・三宅俊隆・桑原武志、畷古文化研究保存会、四條畷市小中学校教育研究会社会科部会の諸機関、諸氏から種々のご教示をうけた。明記して厚く感謝の意を表したい。

6．発掘調査の進行については、日本道路公団大阪建設局には終始懇切なご協力をうけることができた。又調査作業については、株式会社森組、奥野重機の全面的な協力を得た。

本　文　目　次

はしがき

例　　言

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1 頁

Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境 …… 3 頁

Ⅲ．調査概要報告 …… 6 頁

　　A．基本層序 …… 6 頁

　　B．遺　　構 …… 6 頁

　　a．甕棺 …… 7 頁

　　b．溝 …… 7 頁

Ⅳ．出土遺物 …… 9 頁

Ⅴ．まとめ …… 20 頁

挿　入　目　次

第１図　雁屋遺跡調査地位置図

第２図　雁屋遺跡周辺地形遺跡分布図

第３図　雁屋遺跡遺構配置図

第４図　雁屋遺跡第１号甕棺実測図

第５図　雁屋遺跡遺物実測図・Ⅰ

第６図　雁屋遺跡遺物実測図・Ⅱ

第７図　雁屋遺跡遺物実測図・Ⅲ

第８図　雁屋遺跡弥生式土器拓影

第９図　雁屋遺跡遺物実測図・Ⅳ

第10図　雁屋遺跡遺物実測図・Ⅴ

第11図　河内湾岸の弥生前期から中期初頭の遺跡分布図

図 版 目 次

図 版 1　遺跡周辺の航空写真

図 版 2　雁屋遺跡調査地全景

図 版 3　雁屋遺跡遺構全景

図 版 4　雁屋遺跡第1号甕棺検出状況

図 版 5　雁屋遺跡第1号甕棺検出状況

図 版 6　遺物写真・土器Ⅰ

図 版 7　遺物写真・土器Ⅱ

図 版 8　遺物写真・土器Ⅲ

図 版 9　遺物写真・土器Ⅳ

図 版 10　遺物写真・土器Ⅴ

図 版 11　遺物写真・土器Ⅵ・石器Ⅰ

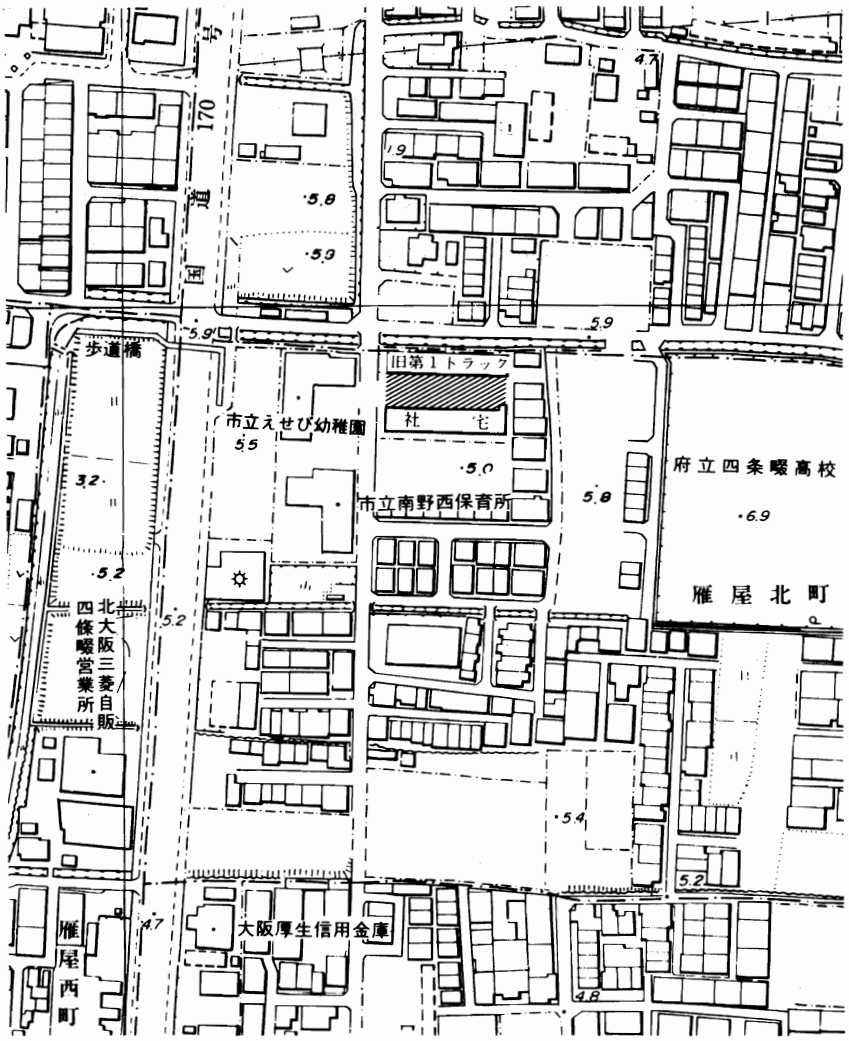
図 版 12　遺物写真・石器Ⅱ

図 版 13　遺物写真・石器Ⅲ

雁屋遺跡発掘調査概要・Ⅰ

Ⅰ．調査に至る経過

雁屋遺跡は、大阪府立四條畷高等学校の西約100メートルに位置する大阪湾海抜5.5メートルの旧水田地に発見された弥生時代前期から後期と古墳時代後期、鎌倉時代の3時期の複合遺跡であります。



第1図　雁屋遺跡調査地位置図（S＝1/2500）

この地域は、大阪府文化財分布地図には周知の遺跡として知られていなかった場所であった。

1982年秋に四條畷市雁屋北町370番-1、370番-2の旧第一トラック用地において、日本道路公団大阪建設局から四條畷職員宿舎建設予定の計画が四條畷市に提出され、各関係部局との協議がなされた。

市教育委員会として、今回の宿舎建設予定地の東側にある府立四條畷高等学校建設中に貝殻及び土器片が採集されていたと伝えられていた。しかし採集品の土器片を実見していないため時代・出土状況などは不明であったが、市開発指導要項に基づき試掘調査を実施する旨を日本道路公団に伝え、1983年2月1日から5日間の予定で遺跡の有無及び基本層序を正確に把握するための試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、地表下約2.5メートルから弥生時代前期の遺物包含層・黒色粘土層が確認され、この層内から弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式新段階）の壺・甕の土器類が出土した。

試掘調査によって検出された遺跡について、大阪府教育委員会及び文化庁へ遺跡発見届出を行なった

日本道路公団と市教育委員会が再三にわたり協議の結果、宿舎建設予定地と浄化槽の約420平方メートルの全面発掘調査を1983年5月から7月までの予定で本格調査を実施した。

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

雁屋遺跡は大阪府四條畷市雁屋に所在する。四條畷市は大阪府の北東部に位置し、奈良県との県境になる。西は寝屋川市、南は大東市、北部は交野市に隣接する東経135°38′、北緯34°44′にある。地勢の東半分は生駒山系支派の山地となり、主として第3期花崗岩によって形成された地質である。北部平坦地はこれら山地から流出された砂礫による沖積層となっている。

本市のほぼ中央を南北に通じる東高野街道沿いには、中世の掘立柱建物跡・井戸・溝等の遺構が存在し、また、東西に通じる清滝街道沿いには中世の時期に清滝・逢阪千軒と呼ばれた中世村落が栄えていたことがうかがえられる。このように四條畷は陸路交通の要地として地理的に重要な位置を占めていたことは、原始の時代から文化的先進地域の様相を呈し、多くの遺跡の存在が知られている。

当遺跡は生駒山系の西側斜面から流出する江瀬美川の左岸にある。この江瀬美川は寝屋川を経て大阪湾に注いでいる。

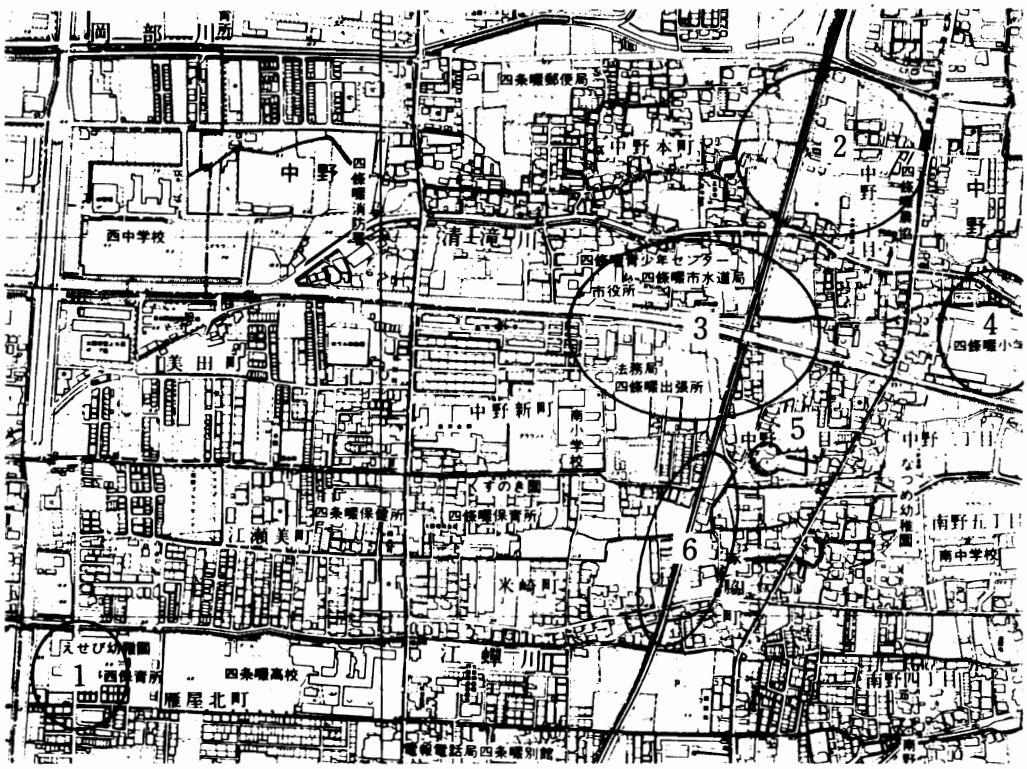
生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は八幡丘陵から南は南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵、段丘があり、この枚方台地は大きく北から枚方市船橋川・穂谷川・交野市天野川・寝屋川市寝屋川・四條畷市讃良川・清滝川という中小河川によって開かれている。この枚方台地には原始・古代の幾多の遺跡の存在が知られている。

最近になって旧石器時代の遺物を発掘調査によって明らかになってきた。枚方台地の旧石器時代遺跡としては、現在のところ20遺跡が知られており、特に国府期のナイフ形石器・有舌尖頭器が出土している枚方市楠葉東遺跡、ナイフ形石器・小型舟底形石器・石核が出土した津田三ツ池遺跡、細石器・石核が出土した藤阪宮山遺跡、国府型ナイフ形石器・石核が出土した交野市神宮寺遺跡、ナイフ形石器・細石器・削器・彫器・礫器等を出土した四條畷市更良岡山遺跡、木葉状尖頭器が出土した岡山南遺跡、有舌尖頭器を出土した南山下遺跡が知られている。他に表面採集された寝屋川市打上、四條畷市忍岡古墳附近においてもナイフ形石器が採集されており、旧石器文化研究上枚方台地はきわめて重要な位置をしめしている。

縄文時代には米粒文、山形文を施した押型文土器を特徴とする土器が出土する交野市神宮寺遺跡、四條畷市田原遺跡、東大阪市神並遺跡において近畿地方で最古の土器が出土している。又、枚方市穂谷遺跡、大東市寺川堂山にも早期の土器が発見されている。

前期には石器のみ採集された津田三ツ池遺跡が知られる。

中期には渦巻文や半截竹管文をもつ船元式土器を出土する四條畷市南山下遺跡・砂遺跡、交野市星田旭遺跡があり、後期・晩期にはほぼ完形の高杯形土器・深鉢形土器・注口土器・土製勾玉・土偶等多量の土器・石器が出土する四條畷市更良岡山遺跡、岡山南遺跡・清滝



第２図　雁屋遺跡周辺地形遺跡分布図（Ｓ＝1/10,000）

１．**雁屋遺跡**　　３．中野遺跡　　５．墓の堂古墳

２．奈良井遺跡　　４．四條畷小学校内遺跡　　６．塚脇遺跡

古墳群においても石鏃、深鉢形土器が出土する。

枚方市交北城ノ山遺跡において滋賀里式系の深鉢形土器を転用した埋甕遺構が発見されている。

弥生時代については今回の四條畷市雁屋遺跡から畿内第Ⅰ様式古段階の高さ約67cmの大壺が出土しており、古代河内湾の時代で最北端で発見され、北河内で最古の遺跡と知られている。また四條畷市田原遺跡において前期末の壺が出土している。

中期初頭の畿内第Ⅱ様式の時期に出現する高地性集落の寝屋川市太秦遺跡や第Ⅱ様式～第Ⅳ様式に認められる直径11.5m の巨大な竪穴式住居跡をもつ田ノ口山遺跡、交北城の山遺跡で第Ⅱ様式から始まる方形周溝墓42基・竪穴式住居跡８棟・土壙・高床式建物跡が検出された場所は穂谷川水系沿いに立地している。

後期の第Ⅴ様式になると枚方市・交野市・寝屋川市の淀川左岸地域においては数多く点在する。代表的なものとしては、小型紡製鏡や分銅形土製品が出土した鷹塚山遺跡、六角

形の竪穴式住居跡が発見された山之上天堂遺跡、鹿の絵の線刻した土器が出土した藤田山遺跡、住居と墓地をV字溝によって分離した星ヶ丘西遺跡、一棟の竪穴式住居跡から鉄鏃を含む53個の鉄器片が出土した星ヶ丘遺跡等があげられる。

古墳時代について見ると、眼下に淀川を見下ろす水運との関係を考えなければならない万年寺山古墳から8面の銅鏡が出土している。又、直径25mの円墳と考えられ画文帯環状乳神獣鏡1面・銅鏃6本・鏃形石製品2個他を出土した藤田山古墳、粘土槨内から硬玉製勾玉・ガラス製小玉・碧玉製管玉・鉄剣・刀子を出土した交野市妙見山古墳、全長約90mの前方後円墳で後円部に長さ約6.3m、幅約1mの竪穴式石室を今なお見ることのできる忍岡古墳がある。

交野市の森古墳群から前方後円墳と円墳を含む8基の前期古墳群が確認されており、眼下に巴形銅器・筒形銅器を出土した交野車塚古墳、中期になると枚方市禁野車塚古墳、牧野車塚古墳、四條畷市墓の堂古墳がある。後期になると生駒山系西麓に数多く分布しており、特に大東市堂山古墳群・四條畷市清滝古墳群・更良岡山古墳群・交野市寺古墳群・倉治古墳群・枚方市中宮古墳群・臼雉塚・比丘尼塚・北河内最大の横穴式石室をもつ寝屋川市寝屋古墳、終末期には国史跡指定されている石ノ宝殿古墳がよく知られている。

古墳時代の集落跡の発見は、四條畷市が大半を占めている。四條畷市岡山南遺跡の大溝内から切妻造りの家形埴輪に5個の堅魚木をつけたものや、円筒埴輪・蓋形埴輪・動物形埴輪とともに木製下駄も出土している。中野遺跡においては5世紀後半の製塩土器や最古形式の須恵器とともに勾玉・臼玉・紡錘車・木製剣が多量の土器とともに出土している。隣接地の奈良井遺跡には実際に製塩作業を行った石敷製塩炉及び1辺約40mの方形周溝遺構の祭祀場が検出し、周溝内から多量の土器とともに手捏ね土器・人形土製品・動物形土製品・滑石製品がそれぞれ一括で出土している。又、同一溝内から小型の蒙古系馬が埋葬されていた。古代から中世にかけての遺跡は各市において数多く知られている。

Ⅲ　調査概要報告

今回の江瀬美川左岸の四條畷市雁屋北町370―1番地は旧第1トラックの社宅2棟が1980年頃まで建てられていたもので今回は社宅2棟を取り崩しその間に3階建1棟が建設されるための本確調査である。

調査は、1983年2月1日から5日間に旧第1トラック社宅の浄化槽の西側に5メートル×7メートルのトレンチ（試掘穴)、この場所は公団宿舎建物の東端に位置する。また、建物の中央部に3メートル×7メートルのトレンチ、公団浄化槽の位置に3メートル×4メートルのトレンチの計3ヶ所を設定して遺跡の有無及び遺構の保存状態と基本的な層序の確認を行った。

試掘調査ではトレンチ設定のため遺構の存在は不明であったが全域にわたり黒色粘土層の弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式）の遺物包含層が確認された。その際の基本層序は以下の通りである。

A．基本層序

調査地の東端に設定した第1トレンチの北壁断面の基本層序は、第Ⅰ層（盛土)、第Ⅱ層（旧耕土)、第Ⅲ層床土、第Ⅳ層黄褐色砂質土、第Ⅴ層褐色砂質土、第Ⅵ層赤灰色砂質土、第Ⅶ層灰色粘土、第Ⅷ層黒色粘土、第Ⅸ層黒色砂質土、第Ⅹ層黄白色砂層となる。各層は東から西へ少し傾斜しているが、これは地形によるものである。遺構のベース面である第Ⅸ層下においては全く傾斜面をもたないフラット面に検出されている。

第Ⅰ層　盛土、旧第1トラック社宅建設時に盛土造成を行っていた。

第Ⅱ層　戦後まで水田であった。

第Ⅲ層　厚さ12～15cmで全域に認められる。

第Ⅳ層　厚さ25～30cmで東から西へ少し傾斜している。

第Ⅴ層　厚さ25～30cmで第Ⅳ層と同じ傾斜をしている。

第Ⅵ層　厚さ20～25cmで全域に認められる。

第Ⅶ層　厚さ15cmで全域に認められる。

第Ⅷ層　厚さ12～18cmで弥生前期の遺物包含層。

第Ⅸ層　厚さ10cmで第Ⅷ層同様弥生前期の遺物包含層。

第Ⅹ層　弥生前期の遺構ベース面である。

B．遺　　構

今回の本確調査で検出した主な遺構には、甕棺・溝の遺構である。このうち甕棺な第Ⅷ層の黒色粘土層から掘り込まれており、土器形式編年から弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式）

のものである。又、下層で検出した溝は弥生前期（畿内第Ⅰ様式）に掘られたことは、遺構上面において出土した器高約67cmの大壺があり、この時期に比定される。

a．甕棺

調査地区の西南部分のK-013に甕棺1基検出した。弥生前期の包含層である黒色粘土層から掘り込まれた長さ73cm、幅57cm、深さ35cmの楕円形、円底状土壙内に弥生中期の甕形土器に鉢形土器で蓋としてかぶせたままの状態で口を東に向け長軸方向はN-80-Eで土器棺の傾角は22°80′を計る。

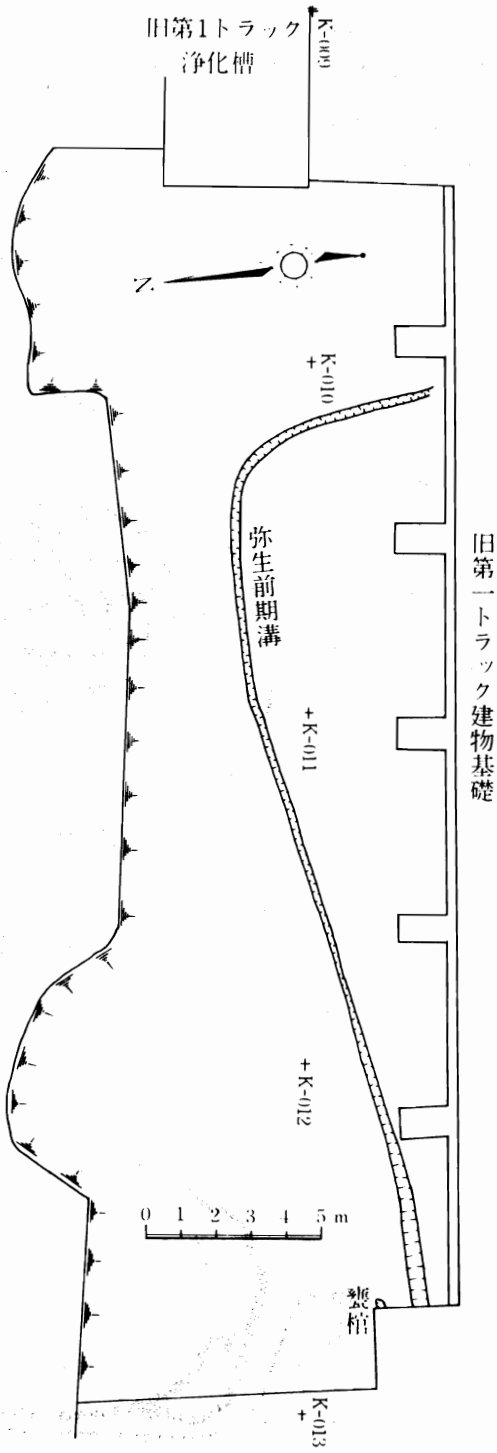
蓋には、口径34.8cm、器高22.1cm、腹径40.2cm、底径10.0cmの鉢を用い、土器棺には、口径29.3cm、器高46.2cm、腹径36.1cm、底径9.3cmの完全な形の甕形土器を用いている。鉢及び甕の特徴に関しては出土遺物の項で詳述することとする。

棺内には流入土と考えられる細かく軟かい暗灰色土が流満していたが、甕の内部からは人骨その他の副葬品は検出できなかった。又、甕棺上に盛土等の施設の存在も確認できなかった。

b．溝

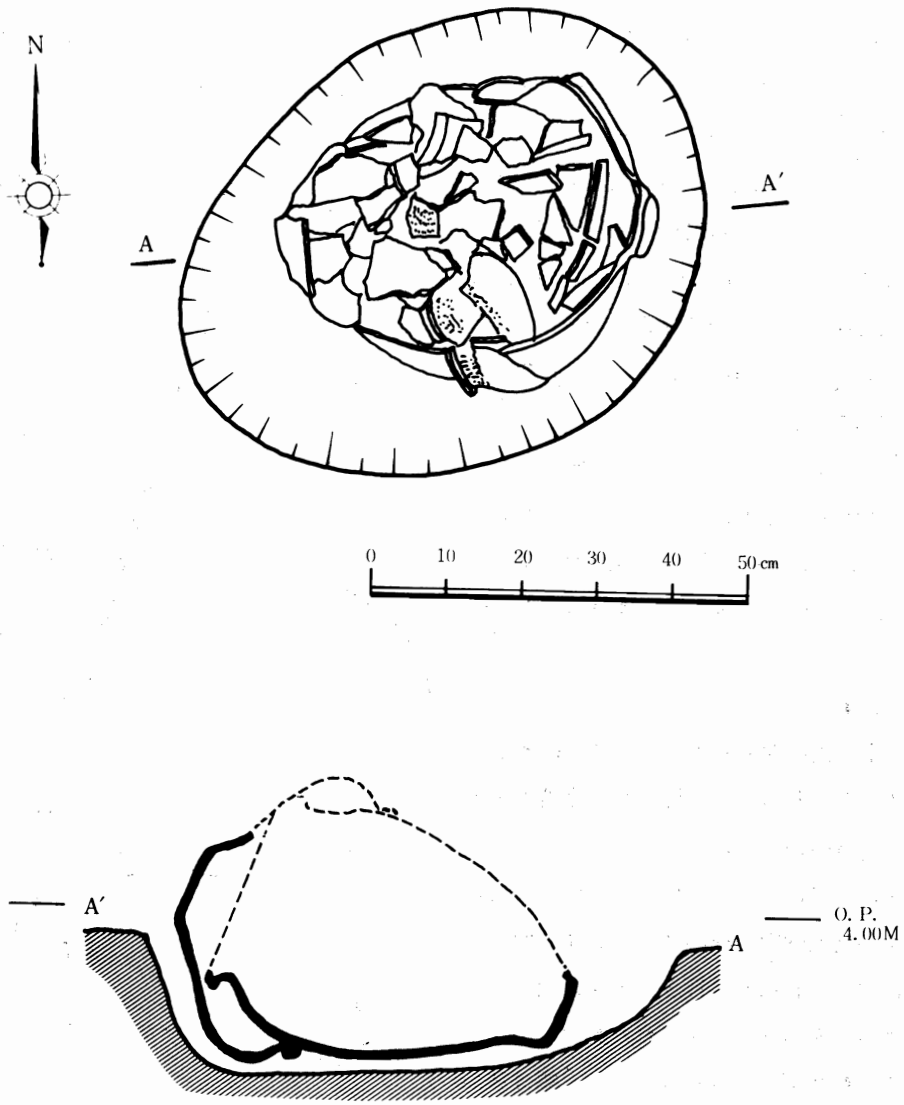
弥生時代前期の始め（畿内第Ⅰ様式古段階？）の時期のものと思われる遺構は溝1条で、溝中から遺物は出土していない。

溝はK-013からK-012・Ⅰ-012・Ⅰ-011・K-011区画内で検出された。溝は西から東に向って直線的に行き、Ⅰ-011地区でほぼ直角に南へ向って掘られた断面U字形の溝で、幅40cm、深さ30cmを計る。幅は狭い所で30cm、広い所で50cmある。埋土は黒色砂層によって埋めつくされている。



第3図　雁屋遺跡遺構配置図

溝の時期は、遺物が出土しなかったために不明であるが、Ⅰ-011地区内の溝コーナ肩部上面に口径36.8器高約67cm、腹径61.5の大型の壺形土器である。器形的には、肩がはり、胴部と頸部の境には段をつけ、又、口縁下にも段をもつ。頸部はやや内傾ぎみに下り、口縁部は大きく外反する。器体外面は横方向のヘラ研磨調整をする良好な弥生文化成立期の土器である。又、同一層内から縄文式土器3点が出土している。この土器は縄文時代最終末の長原式のもので、これらの土器からみて、溝の時期は縄文時代最終末～弥生時代前期初頭に相当することは明らかで、どちらかと言えば弥生時代の人々によって掘られた溝と考えられる。



第4図　雁屋遺跡第1号甕棺実測図

Ⅳ　出土遺物

今回の調査において出土した弥生式土器としては、畿内第Ⅰ様式・第Ⅱ様式・第Ⅲ様式第Ⅴ様式の土器である。量的にみると、第Ⅰ様式の土器が大部分で約90%、ついで第Ⅴ様式が約8%あり、第Ⅱ様式と第Ⅲ様式は少量である。

第Ⅰ様式の土器は、セット関係が認められ、実用的な甕が約60%、壺が40%、鉢・蓋が各1点が認められている。

壺には北九州の板付式土器において、段が口縁部、頸部、胴部に確然たる区分文様をもつものがあり、畿内最古型式の弥生式土器が出土している（第5図―1）。

しかし大半の壺形土器は、削り出し突帯第Ⅰ種、第Ⅱ種少条、篦描沈線文小条の区分文様（第6図～第8図）をもっている。又、貼付突帯があらわれ、篦描沈線が多条化の区分文様に変化する段階のものも含まれており、佐原真氏が（「山城における弥生式文化の成立」1967）に第Ⅰ様式の古段階・中段階・新段階の3段階に細別されている。

雁屋遺跡においてはこの3段階の特徴をもつ土器が出土しているが、出土状況から考える上においては、古段階・中段階の土器を層位的に分けることは困難であり、同一層内において古段階・中段階の土器が包含層の中に含まれることから、井藤暁子氏が（「入門講座・弥生土器―近畿Ⅰ」1981）に第Ⅰ様式を前期Ⅰ―第Ⅰ様式前半，前期Ⅱ―第Ⅰ様式後半に区分されている。

第Ⅰ様式の出土する壺・甕からみて、井藤氏の区分が遺跡での出土から見る限り区分がスムーズに解釈することができる。

第Ⅰ様式から第Ⅱ様式への過渡期の土器として櫛描直線文土器（第7図-45）が認められる。

第Ⅲ様式にみられる短く外反する口縁部をもつ鉢で胴部に簾状文と列点文をもつ文様と土器腹部が張り、口縁部は体部から「く」の字に屈曲し端部は面をつくり上下に少し突出する甕とを組合わせた甕棺（第9図―77～78）1基がある。

第Ⅴ様式のものとしては、叩き目文様の土器片及びこの時期の底部（第7図）が数点ずつ出土している。

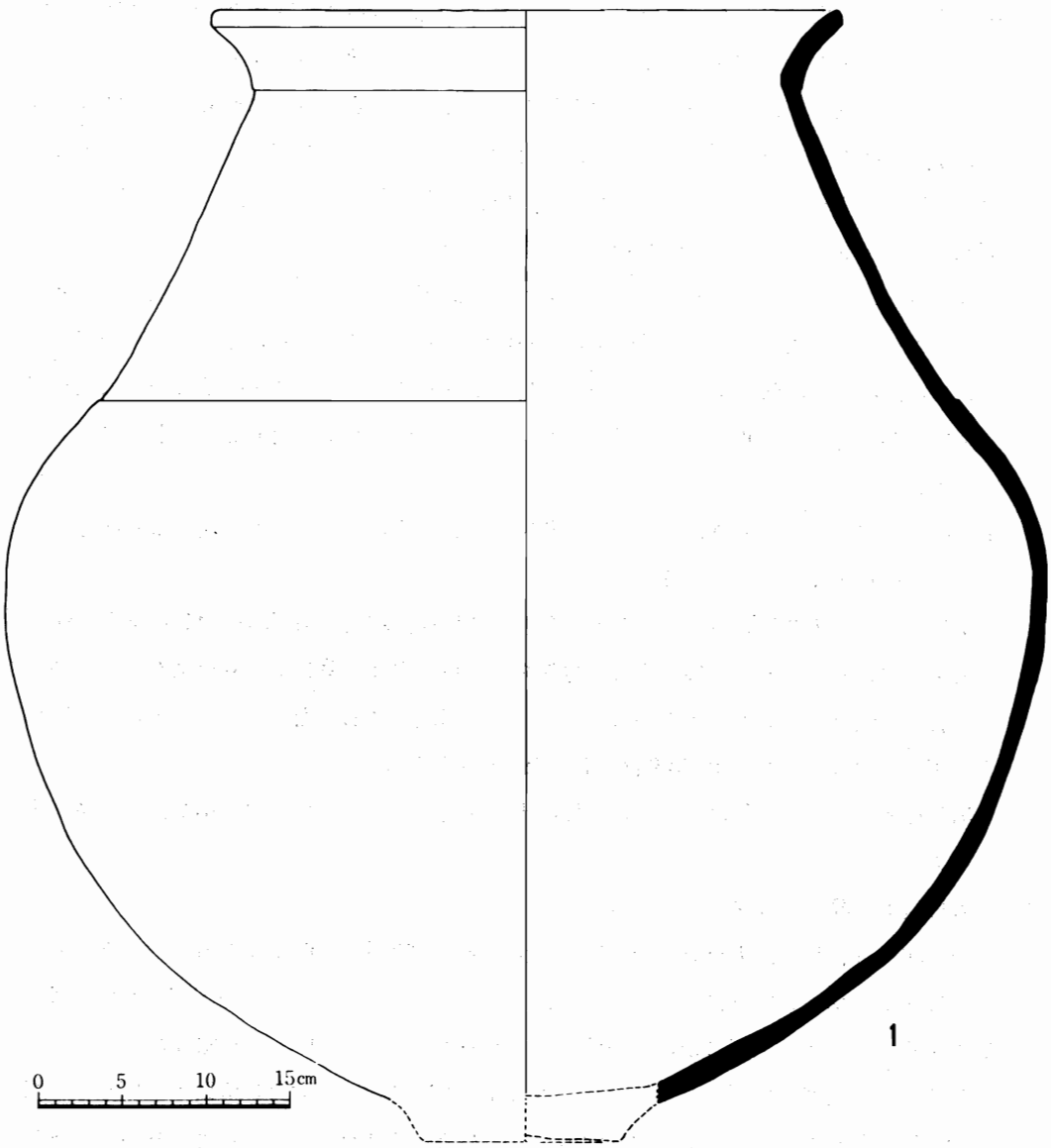
大形壺形土器（第5図―1・図版6）

口径36.8cm、胴部最大径61.5cm、残存高64.7cm、復原器高約67cmを計る。口縁部は外反し、幅5cmに粘土を貼り付けてめぐらし肥厚させている。すなわち口縁下端において段を形成する。頸部から胴部にかけての境には、篦研磨によって生じた凹線が段となって形成している。胴部は球形をなしている。底部は欠失しているが貼付け痕跡から円盤貼り付け状と推定される。外面は横・斜方向の丁寧な篦研磨で調整する。口縁部は横方向の篦研磨を行う。胎土には石英を含み焼成は良好で胴部に黒斑を残す。色調は黄褐色をなす。内面胴上部から頸部にかけて粘土帯の接合部を指で押えた痕跡がみられる。

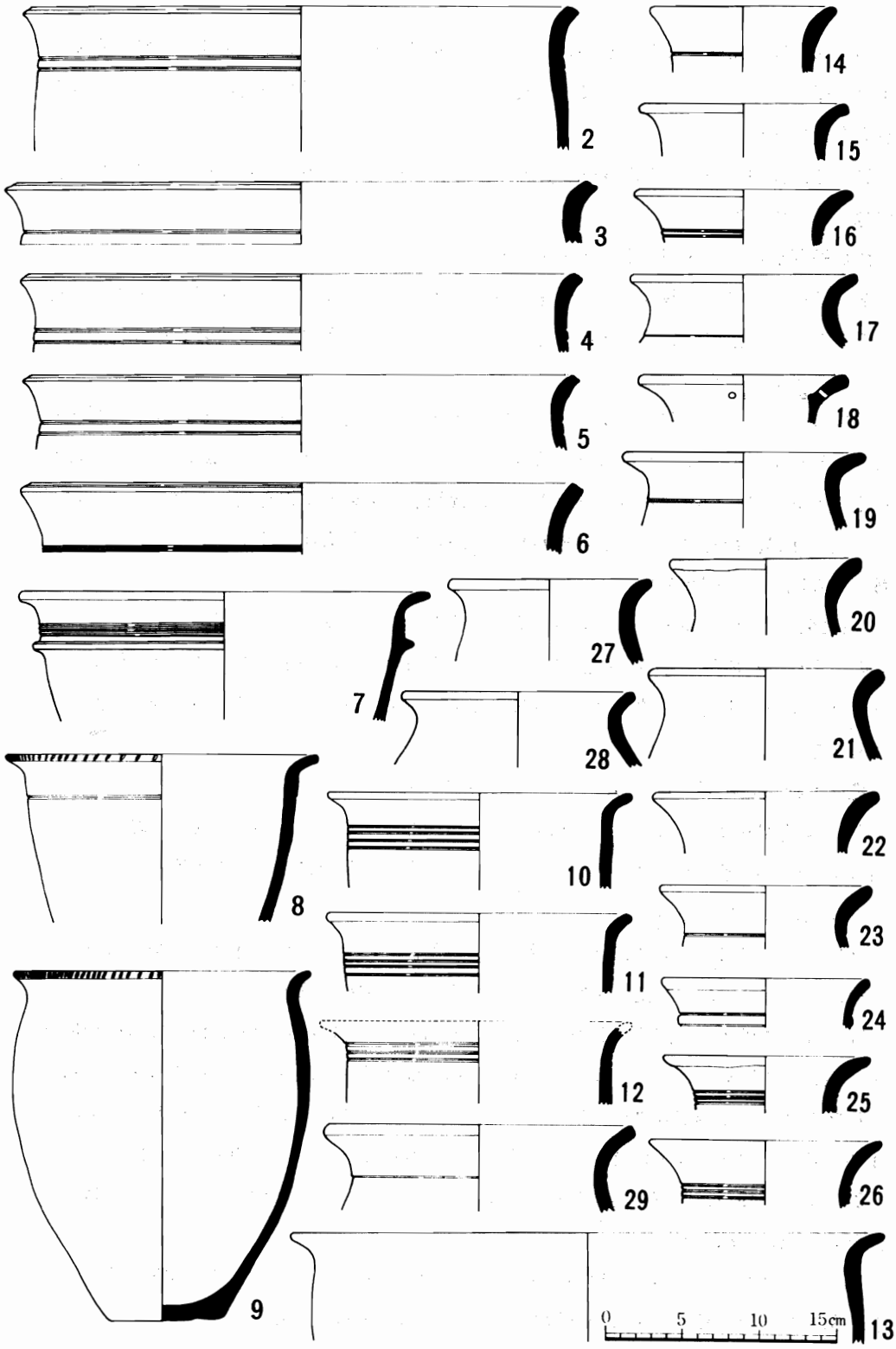
壺形土器・A（第6図—17・29・第7図—30～31・図版8）

17）は口径14.4cm、残存高 4.5cmを計る。口縁部は外反し、幅4cmの粘土を貼り付け肥厚させている。口縁下端に段を形成している。

29）は口径19.6cm、残存高5.5cmを計る。口縁部は外反して幅3.5cmの粘土を貼り付け肥厚している。口縁下端に段を形成している。



第5図　雁屋遺跡遺物実測図・Ⅰ



第6図　雁屋遺跡遺物実測図・Ⅱ

30）は口径24.8cm、残存高5.8cmを計る。口縁部は大きく外反して幅3cmの粘土を貼り付け肥厚している。口縁下部に段を形成している。胎土には河内の土器とされている角閃石を多量に含む。

31）は口径19.4cm、残存高5cmを計る。口縁部は外反し、幅4.1cmの粘土を貼り付け、口縁下端に段を形成している。

大形甕形土器（第6図－2～6・図版8）

2）は口径34.4cm、残存高9.5cmを計る。口縁部は少し外反し、口縁端部に1条の沈線を刻している。頸部に2条の篦描沈線を施している。内外面共によく研磨せられた仕上げである。胴部はややふくらみをもたせたもの。

3）は口径37.0cm、残存高4cm。4）は口径35.4cm、残存高 5.0cm、5）は口径35.0cm、残存高5.0cm、6）は口径35.0cm、残存高4.5cmをそれぞれ計る。これらは2）の大形甕形土器と同様に、口縁部を少し外反させ、口縁端部に1条の沈線を刻している。又、頸部に2条の篦描沈線を施していると思われる。内外面共に研磨仕上げをしている。

鉢（第6図－7・図版9）

口径26.0cm、残存高8.3cmを計る。甕形土器と同じく外反する口縁部を有する。この時期の第Ⅰ様式新段階になると体部に瘤状の把手を付けるものが多いが、この鉢は体部に貼り付け突帯を1帯施し、頸部直下に3条の篦描沈線文を施したものである。内・外面を篦研磨をなす。

甕形土器（第6図－8～13、第7図－32～43・図版9）

8）は口径20.0cm、残存高11.0cmを計る。口縁部は「く」の字形に外反し、端部はやや角ばる。口縁端部に刻み目、頸部に1条の沈線を有す。胎土には河内の土器とされる角閃石が多量に含まれている。

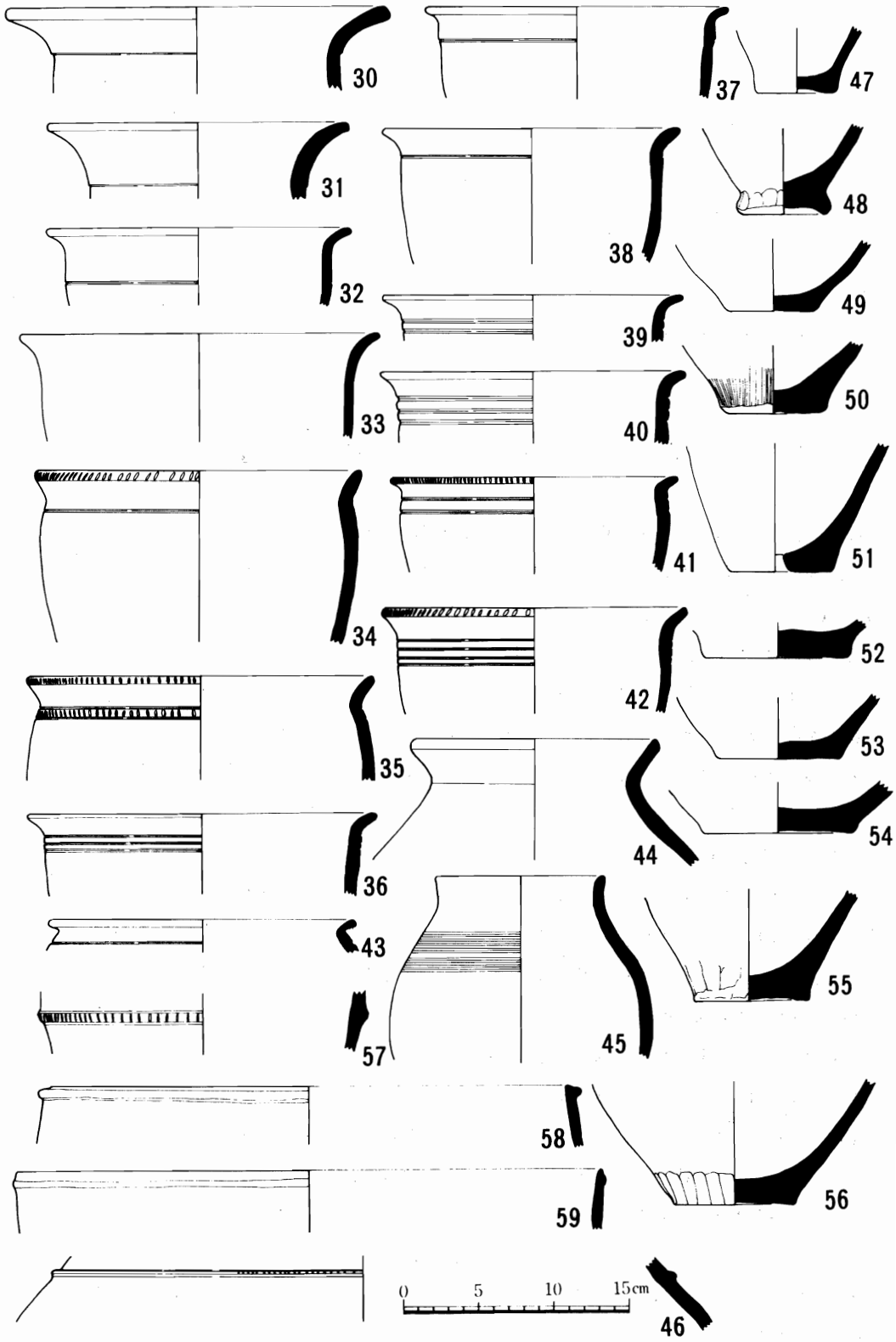
9）は口径19.0cm、器高22.6cmを計る。口縁部は「く」の字形に外反し、端部は丸い。口縁端部に刻み目のみで沈線を有しない。胎土には角閃石を含む。

10）は口径19.0cm、残存高6.3cm、11）は口径19.0cm、残存高5.2cm、12）は口径約19.5cm、残存高約5.3cmをそれぞれ計る。10）の口縁部は外反し肥厚する。端部は丸い。11）の口縁部は外反し端部は丸い。12）の口縁部は欠失して不明である。10）・11）は頸部に4条、12）は頸部に3条の沈線をそれぞれ有す。10）・11）は胎土に角閃石を含む。

32）は口径19.8cm、残存高5.0cmを計る。口縁部は「く」の字形に外反し、端部は丸い。頸部に1条の沈線を有す。

34）は口径21.0cm、残存高11.3cmを計る。口縁部は外反し、肥厚する。端部は丸い。口縁端部に刻み目、頸部に1条の沈線を有す。胎土に角閃石を含む。

35）は口径22.6cm、残存高6.8cmを計る。口縁部は「く」の字形に外反し、端部はやや角ばる。口縁端部に刻み目、頸部に2条の沈線を有す。2条の沈線の間に篦状工具の刺突



第７図　雁屋遺跡遺物実測図・Ⅲ

文がある。胎土に角閃石を含む。

36）は口径22.4cm、残存高5.3cmを計る。口縁部は「く」の字形に外反し、端部は丸い。頸部に3条の沈線を有す。

37）は口径20.0cm、残存高6.0cmを計る。口縁部は「く」の字形に外反し、端部まやや丸い。頸部に1条の沈線文帯を浮き上らす感じのもので沈線下を篦磨き手法で押えているものであろう。

38）は口径19.0cm、残存高9.0cmを計る。頸部に1条の沈線を有す。

39）は口径29.6cm、残存高3.0cmを計る。頸部に2条の沈線を現存するが、40）の口径とほぼ同じく、又、沈線の幅も同一であることから頸部に3条の沈線を有していたものと思われる。

40）は口径29.6cm、残存高4.7cmを計る。口縁部は「く」の字形に外反し、頸部に3条の沈線を有す。

41）は口径19.0cm、残存高6.5cm、42）は口径19.6cm、残存高7.0cmをそれぞれ計る。口縁部は外反し端部は41）が丸く、42）がやや角ばる。口縁端部は共に刻み目を施し、頸部に41）が2条、42）が4条それぞれ有す。42）の胎土には石英砂を多量に含む。

43）は口径20.0cm、残存高2.2cmを計る。口縁部は「く」の字形に鋭く曲がり、頸部に1条の沈線が有す。胎土には石英を含む。

壺形土器・B（第6図—14～28、第7図—44～46・図版8～10）

大形壺形土器及び壺形土器・Aに認められる口頸間に段を形成するもの以外をここでは仮に壺形土器・Bとして取り上げる。ここで取り扱う土器形成には、井藤氏が論じている第Ⅰ様式の細分で前半Ⅰ—b段階のものである削出突帯第Ⅰ種のものや、Ⅰ—c段階の削出突帯第Ⅱ種多条・前半Ⅱ段階に多くみられる貼付け突帯に刻目を入れているもの、短頸壺の肩部に10条＋7条の櫛描直線文を施されているものまで、この壺形土器Bの中に一応入れて説明する。すなわち第Ⅰ様式前半から第Ⅱ様式に含まれる時期までとする。

14）は口径11.6cm、残存高4.3cmを計る。頸部から屈曲して外反する口縁部で頸部に1条の篦描沈線を有す。胎土には角閃石を多く含む。

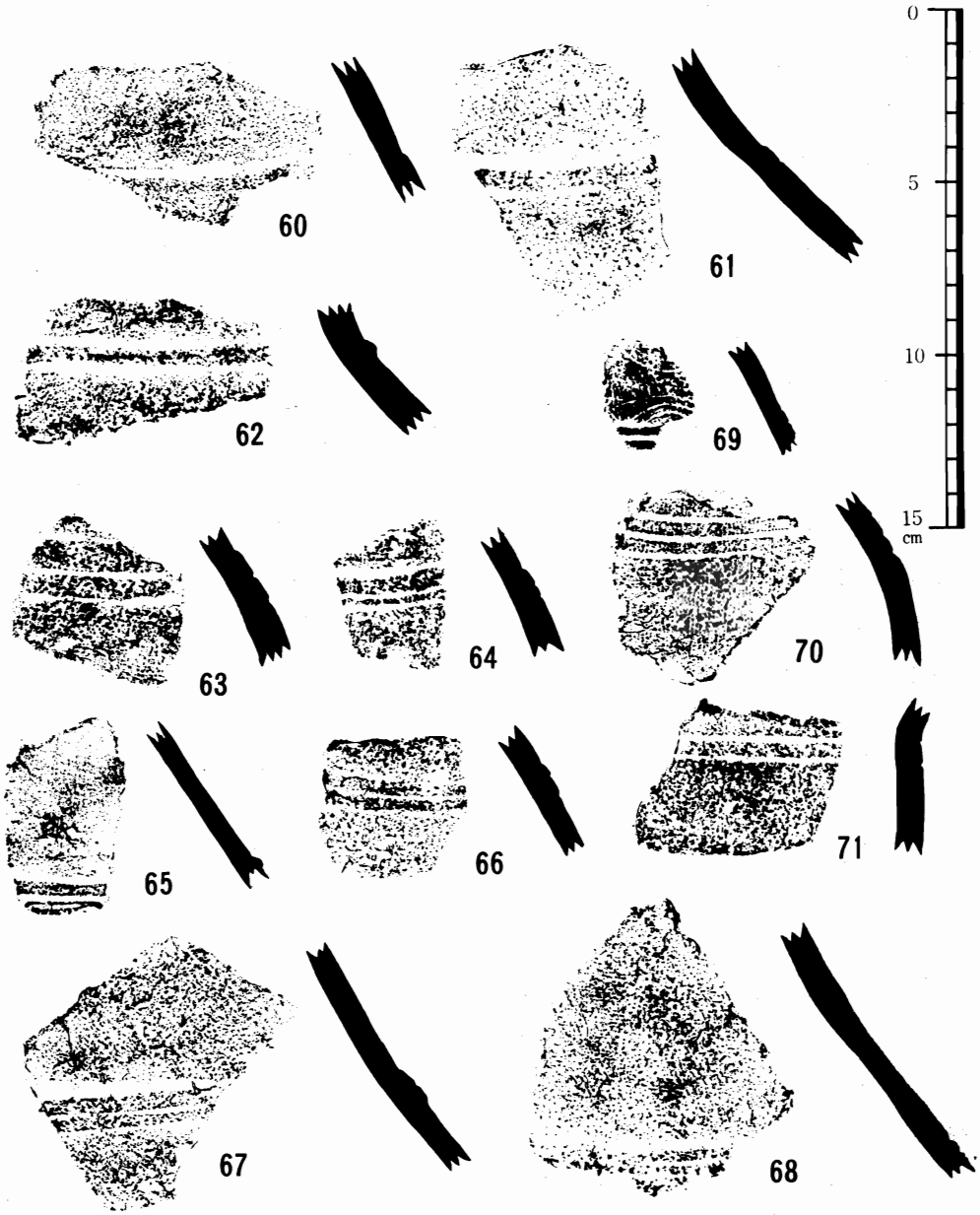
15）は口径13.2cm、残存高3.5cmを計る。頸部から屈曲して外反する口縁部。

16）は口径13.4cm、残存高3.5cmを計る。短く斜めに外反する口縁部で、頸部に2条もしくはそれ以上の篦描沈線文を有す。胎土には角閃石を含む。

17）は口径14.4cm、残存高4.5cmを計る。大きく外反する口縁部で頸部に沈線文帯を浮き上げらす感じのものである。胎土には角閃石を含む。

18）は口径13.0cm、残存高3.0cmを計る。大きく外反する口縁部で、口縁部に焼成前に紐孔を1個穿つ。胎土に角閃石を含む。

19）は口径15.4cm、残存高4.9cmを計る。大きく外反する口縁部で頸部に1条の篦描沈



60　段
61　削出突帯第Ⅰ種
62　削出突帯第Ⅰ種
63　削出突帯第Ⅱ種少条
64　削出突帯第Ⅱ種少条
65　削出突帯第Ⅱ種少条
66　削出突帯第Ⅱ種少条
67　削出突帯第Ⅱ種少条
68　削出突帯第Ⅱ種少条
69　削出突帯十重弧文
70　篦描沈線文少条
71　篦描沈線文少条

第8図　雁屋遺跡弥生式土器拓影

線文を有す。胎土に角閃石を含む。

20）は口径12.0cm、残存高4.9cmを計る。大きく斜めに外反する口縁部を有す。胎土には角閃石を含む。

21）は口径14.6cm、残存高6.0cmを計る。大きく斜めに外反する口縁部を有す。胎土には石英や雲母が含む。

22）は口径14.2cm、残存高4.2cmを計る。大きく外反する口縁部を有す。胎土には角閃石を含む。

23）は口径13.3cm、残存高4.2cmを計る。大きく外反する口縁部で端部を肥厚する。頸部に1条の篦描沈線文を有す。胎土には角閃石を含む。

24）は口径13.0cm、残存高3.2cmを計る。短く外反する口縁部で頸部に削出し突帯を施している。

25）は口径13.0cm、残存高3.7cmを計る。大きく外反する口縁部で頸部に3条の篦描沈線文を有す。胎土には角閃石を含む。

26）は口径14.8cm、残存高4.1cmを計る。大きく斜めに外反する口縁部で3条の沈線帯の上下を篦磨き手法で押えて沈線文帯を浮き上らす感じを出している。井藤氏は前半Ⅰ－b段階の土器である。胎土には角閃石を含む。

27）は口径13.0cm、残存高5.2cm　28）は口径14.8cm、残存高4.9cmをそれぞれ計る。共に大きく外反する口縁部を有す。胎土には角閃石を含む。

44）は口径16.0cm、残存高8.0cmを計る。「く」の字形に大きく外反する口縁部を有す。胎土に石英砂を含む。非河内産の土器である。

45）は口径10.9cm、残存高12.3cmを計る。短頸壺で肩部に10条と7条の櫛描直線文を施こす。胎土には、石英を含む。非河内産であり、摂津の土器と思われる。

46）は壺の肩部の破片である。貼付突帯文を有し突帯面に刻目を施している。胎土に石英を含み非河内産である。

縄文式土器（第7図―57～59・図版11）

58）は縄文時代晩期の最終土器型式である長原式の深鉢の口縁部である。口縁部の突帯は端部の調整と突帯の貼付けを同時に行なう。口縁端部に突帯の上下を挟んでなでている。刻目は磨滅によって小さなD字・O字・V字であるか不明である。

59）も同様の手法によって作られ刻目も磨滅で不明である。

壺・甕形土器底部（第7図―47～56）

実測図可能な底部をここに掲載した。第Ⅰ様式の包含層及び上面の第Ⅲ様式から第Ⅴ様式のものまで含まれている。

51）は底部穿孔土器で内側径 1.0 × 0.8 cm、外側径 2.2 × 2.0cmを計る。孔は焼成前に内側から真直ぐに穿孔される。

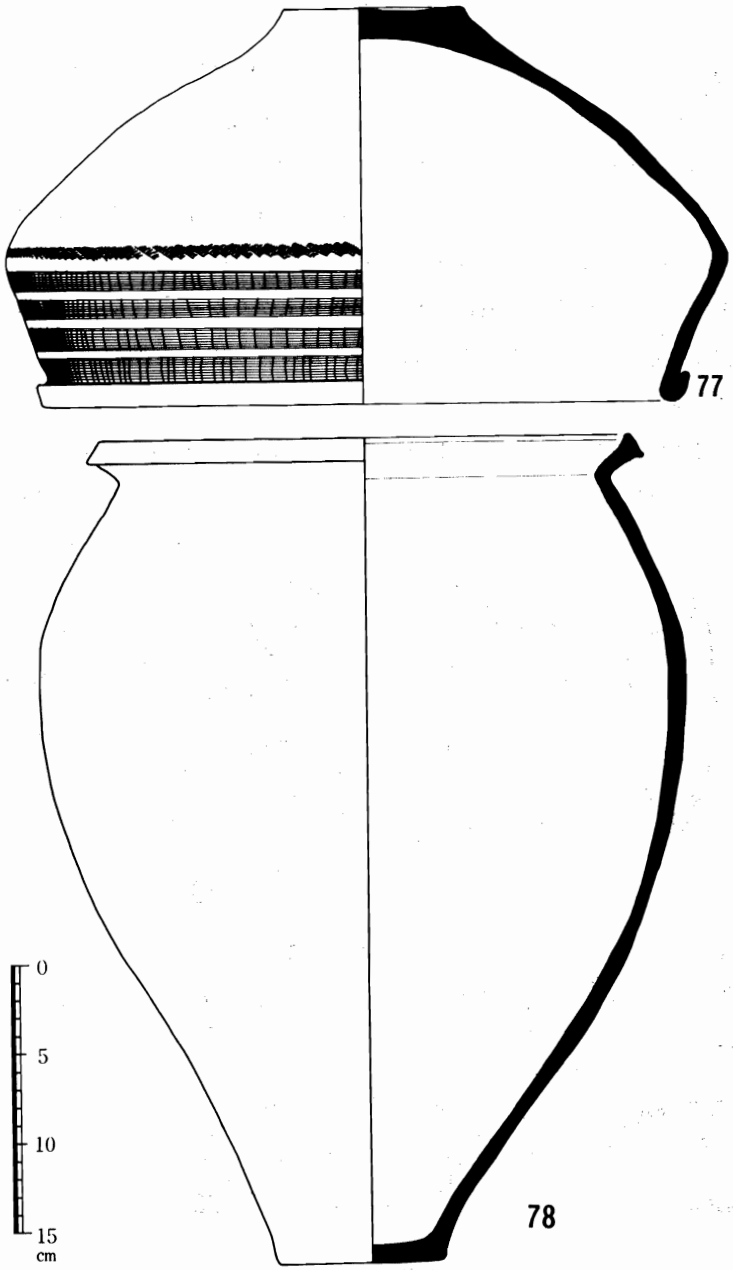
鉢形土器（第９図—77・図版６～７）

口径34.8cm、腹径40.2cm、底径10.0cm、器高22.1cmを計る。完形品で段状の口縁部をもつ。口縁部上端は内方に傾斜。口縁より腹径が大きい。腹部で強く屈曲する。口縁部上端面及び端部内面をヨコナデ、外面施文部以下を横方向のヘラミガキ、内面上端は横方向のヘラミガキ、内面下端は縦方向のヘラミガキ。体部上半に簾状文・列点文を施す。

甕形土器（第９図—78・図版６～７）

口径29.3cm、腹径36.1cm、底径9.3cm、器高46.2cmを計る。完形品で短く立つ頸部に外反する口縁部で、口縁端面上下に拡張。体部の張りは少ない。口縁部端面は強くなでている。口縁部端面・内外面・頸部内面ヨコナデ、頸部外面は刷毛状原体でナデ。外面体部上半に斜め方向の刷毛目、下半は下から上へのヘラケズリを行っている。

この鉢形土器と甕形土器は土器棺として出土したものである。



第９図　雁屋遺跡遺物実測図・Ⅳ

紡錘車（第10図—72～73・図版10）

本遺跡出土の紡錘車は2点である。いずれも円盤形の中心に一孔を穿つものであり、製作時からすでに紡錘車として作られたものである。土器片を再利用して適当な大きさに打ち割り孔を穿ったような紡錘車は1点も出土していない。

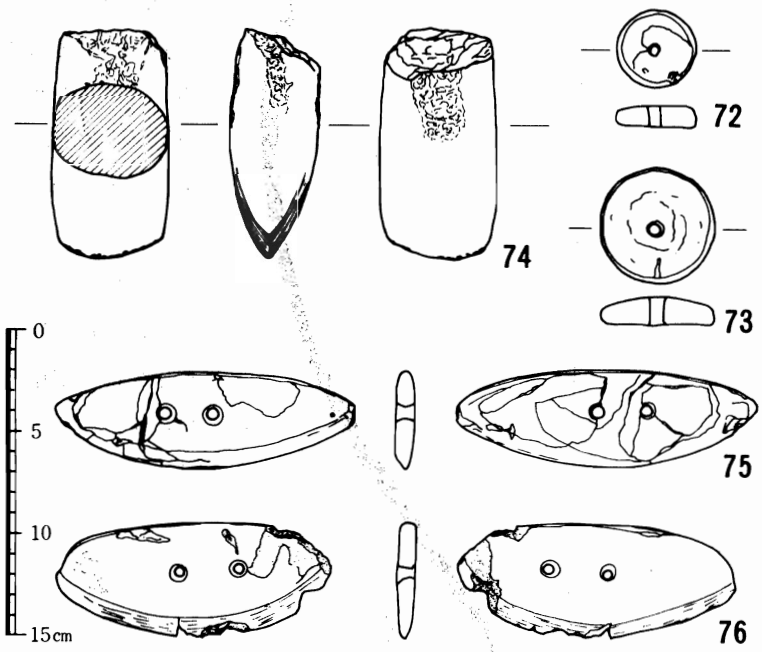
紡錘車2点は前期包含層下層からの出土であって、時期的には削出突帯第Ⅱ種少条の土器と伴出している。

72）は直径 3.9 × 3.8㎝、厚さ 0.8 ～ 1.0㎝、孔径 0.6 × 0.6㎝を計る。完形品で中央部と周縁部の厚みがほぼ一定。側面は押えて面をなす。全体をナデ調整を行う。孔は焼成前に一方から真直ぐに穿孔される。色調は明褐色。

73）は直径 5.6 × 5.7㎝、厚さ 0.9 ～ 1.4㎝、孔径 0.8 × 0.8㎝を計る。完形品で中央部が周縁部よりも厚いが、片面は平坦。側面は丸味をもつ。表面磨滅のため調整不明。孔は焼成前に一方から穿たれたが、他方に穿孔時の粘土が盛り上がりがみられる。孔の縦断面は凵形を呈す。色調は暗褐色で雲母、黒雲母の細粒を大量に含み生駒西麓産である。

大型蛤刃石斧（第10図—74）

本遺跡出土の大型蛤刃石斧は1点である。長さ11.0㎝、幅5.6㎝、厚4.3㎝を計る。基部中央で横割れ、刃先の形状は円刃である。刃先には刃こぼれがみられるが鋭い。表面は丁寧に研磨されている。石材は輝緑岩である。



第10図　雁屋遺跡遺物実測図・Ⅴ

石庖丁（第10図—75～76・図版12）

本遺跡出土の石庖丁は2点である。いずれも杏仁形態のものでほぼ完形品である。時期的には紡錘車と同時期で第Ⅰ様式のものである。この石庖丁のタイプは背部と刃部が同じ位に外弯し、端部が尖がるものである。

75）は長さ14.6cm、幅4.6cm、厚0.9cm、紐孔間距離2.4cmを計る。片刃で両面とも細かな研磨痕がのこる。石材は黒色片岩である。

76）は長さ13.4cm、幅5.6cm、厚0.9cm、紐孔明距離2.9cmを計る。身幅はやや広く、端部はやや円みをもつ。両面共に研磨痕がいちじるしく残る。石材は流紋岩である。

その他の石器として柱状片刃石斧（図版11—81）や、叩石（図版11—79）がある。又、不定形石器（図版13—84）はサヌカイト製である。

V まとめ

今回の調査面積約420平方メートルの中で発見された遺構は弥生時代中期の甕棺、前期の溝が確認され、各遺構内外から時代決定を行う土器・石器・石製品等が多量に出土した。

調査で得た史料と遺物をすべて完全に報告することは膨大な量であり、周辺の遺構と合わせて今後調査報告書を刊行していきたい。従って以下、今回の調査区で検出された時期の遺物が河内湾を取り囲む場所にも同様の出土状況であり、ここでそれらの遺跡との関係を切って考えることができない。そのことから少しふれておきたい。

大阪市鶴見区の府立茨田高等学校建設用地で1974～1975年に調査され、畿内第Ⅰ様式中段階の壺が出土している。湖中中洲では最古の弥生集落である。

四條畷市田原遺跡は、住宅都市整備公団田原団地建設に伴う調査で発見されたもので、大阪と奈良とを結ぶ古道の清滝越えで、交通上の要地でもある。また枚方に注ぐ天の川の上流域であるところでもある。この田原から畿内第Ⅰ様式新段階の壺1点が出土している。

大東市中垣内の関西電力東大阪変電所建設に伴い、1959年7月に調査され3ヶ所の方形の小竪穴住居跡から畿内第Ⅰ様式からⅢ様式までの壺・甕・石器・木製品が出土している。

東大阪市の生駒西麓では7遺跡（芝ヶ丘・西ノ辻・鵜立・水走・鬼虎川・縄手・鬼塚）から前期の土器が出ている。水走・鬼虎川及び縄手以外はすべて土器採集品であるため出土状況は不明である。

鬼虎川遺跡は溝3及び土壙が検出され、内外において壺・甕・鉢がそれぞれ出土しており、第Ⅰ様式のものである。縄手遺跡は縄文時代中期の遺跡として著名であるが、二次堆積土の中から少量の土器片が出土している。

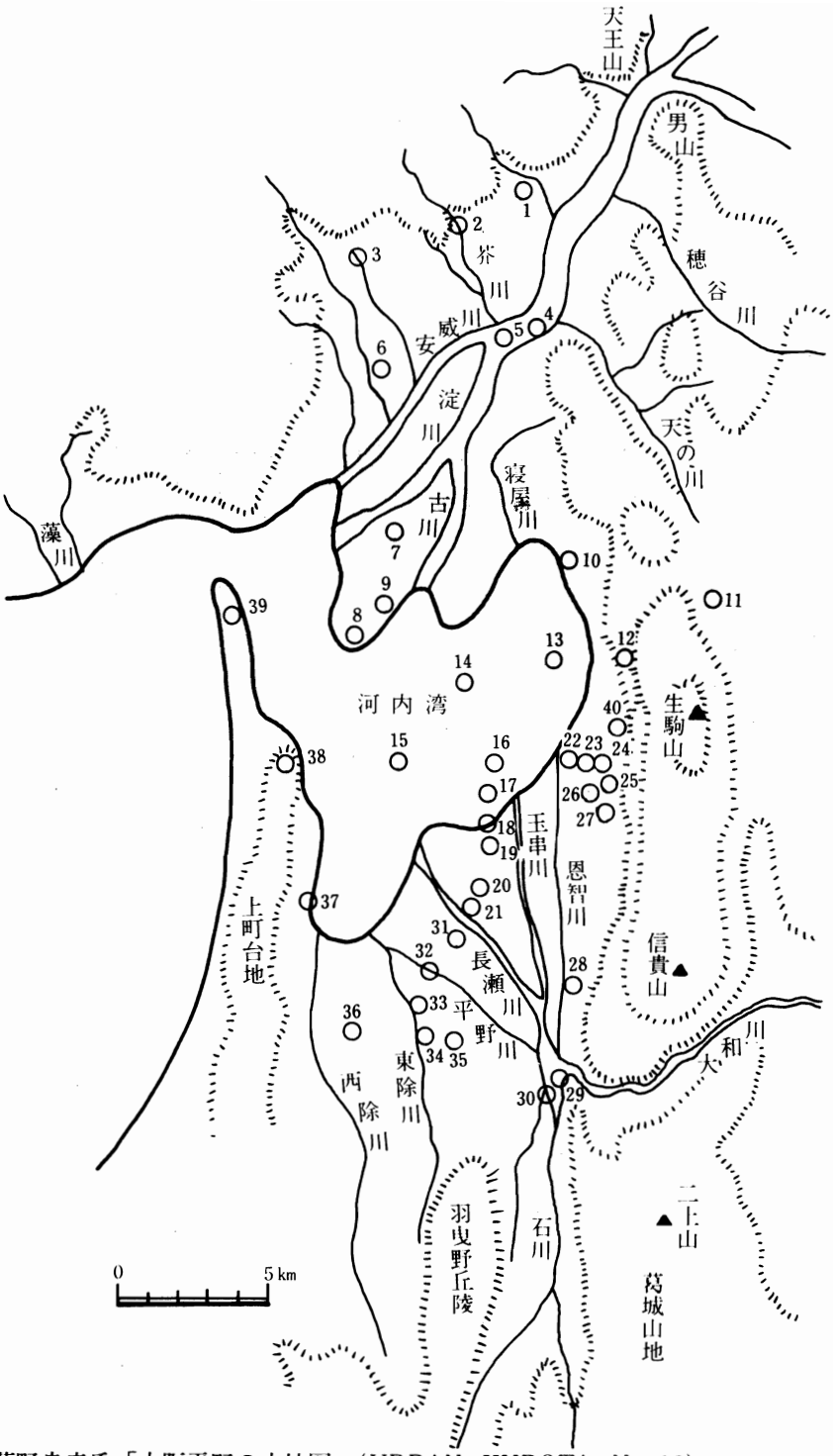
鬼塚遺跡は東大阪市箱殿町に所在する遺跡で弥生前期の遺構は検出されていないが、縄文時代晩期の土器とともに前期の土器片が出土している。

次に東大阪市の中央部で前期の土器が出土する遺跡は、特に玉串川と長瀬川に挟まる地域に多く認められる。北から、新家・西岩田・瓜生堂・若江北・山賀・美園・佐堂の各遺跡で出土しているが、特に山賀遺跡は南北1kmに広がる大集落であり、中央部に集落を形成している北と南が少し下り、中央部が一段高くなっている。8条の溝や土壙状遺構が検出しており、山賀遺跡においては前期の中段階から新段階にかけての集落である。又、美園遺跡においては、南北300mに広がる遺跡で出土した土器からみて第Ⅰ様式の新段階から始まる集落である。

長瀬川の西側から上町台地にかけては、亀井・城山・八尾南・瓜破・桑津・森の宮がそれぞれあげられる。

八尾市恩智において溝2本と流路1本から弥生前期の土器が出土している。溝SD02の下層から第Ⅰ様式の新段階の壺・鉢・甕がそれぞれ出土している。

1．安満遺跡
2．郡家川西遺跡
3．耳原遺跡
4．出口遺跡
5．柱本遺跡
6．東奈良遺跡
7．八雲遺跡
8．森小路遺跡
9．橋波遺跡
10．雁屋遺跡
11．田原遺跡
12．中垣内遺跡
13．灰塚遺跡
14．諸福遺跡
15．茨田安田遺跡
16．新家遺跡
17．西岩田遺跡
18．瓜生堂遺跡
19．山賀遺跡
20．美園遺跡
21．佐堂遺跡
22．水走遺跡
23．鬼虎川遺跡
24．西ノ辻遺跡
25．鬼塚遺跡
26．鵜立遺跡
27．縄手遺跡
28．恩智遺跡
29．船橋遺跡
30．国府遺跡
31．久宝寺遺跡
32．亀井遺跡
33．城山遺跡
34．長原遺跡
35．八尾南遺跡
36．瓜破遺跡
37．桑津遺跡
38．森ノ宮遺跡
39．崇禅寺遺跡
40．芝ケ丘遺跡



藤野良幸氏「大阪平野の古地図」(URBAN KUBOTA No. 16)
梶山彦太郎、市原　実氏「河内湾の時代」
瀬川芳則「淀川左岸低地の集落遺跡－湖北－」(ヒストリア第100号)から作図

第11図　河内湾岸の弥生前期から中期初頭の遺跡分布図

藤井寺市では船橋・国府の2遺跡から前期の新段階の土器が出土している。

最後に河内湾の北岸においてみてみると、大阪市旭区新森の森小路遺跡で1931年に区画整理事業に伴う調査において多数の土器が出土した。これらの土器は畿内第Ⅱ様式のものであるが木製農耕具も出土しており、今後の調査において前期にまで上る可能性がある。

守口市西橋波西之町の大阪電気通信学園から1931年頃に畿内第Ⅰ様式新段階の土器が出土したと伝えられている。

守口市八雲北町の淀川河川敷で1971年に縄文時代終り頃の土器とともに畿内第Ⅱ様式の土器片が採集されている。

守口市長池町においても畿内第Ⅱ様式の土器が出土している。

これらの遺跡と同様の中期に出現する遺跡は他に大東市諸福・新田・灰塚・寝屋川市小路・門真市古川の遺跡があげられる。

今まで見てきたものは、河内湾のほとりに出現する弥生の遺跡、特に雁屋遺跡で出土した前期を中心とした遺跡を列挙したが、やはり畿内第Ⅰ様式の古段階、すなわち壺の口縁下及び肩部に段をもつ土器が出土するのは、雁屋では確実に認められ、大阪府下において始めて九州から弥生文化を持ち込まれた場所は今回の調査地である四條畷市雁屋遺跡であったことが今回の調査において明らかになった大きな成果である。

図版

図版1　遺跡周辺の航空写真

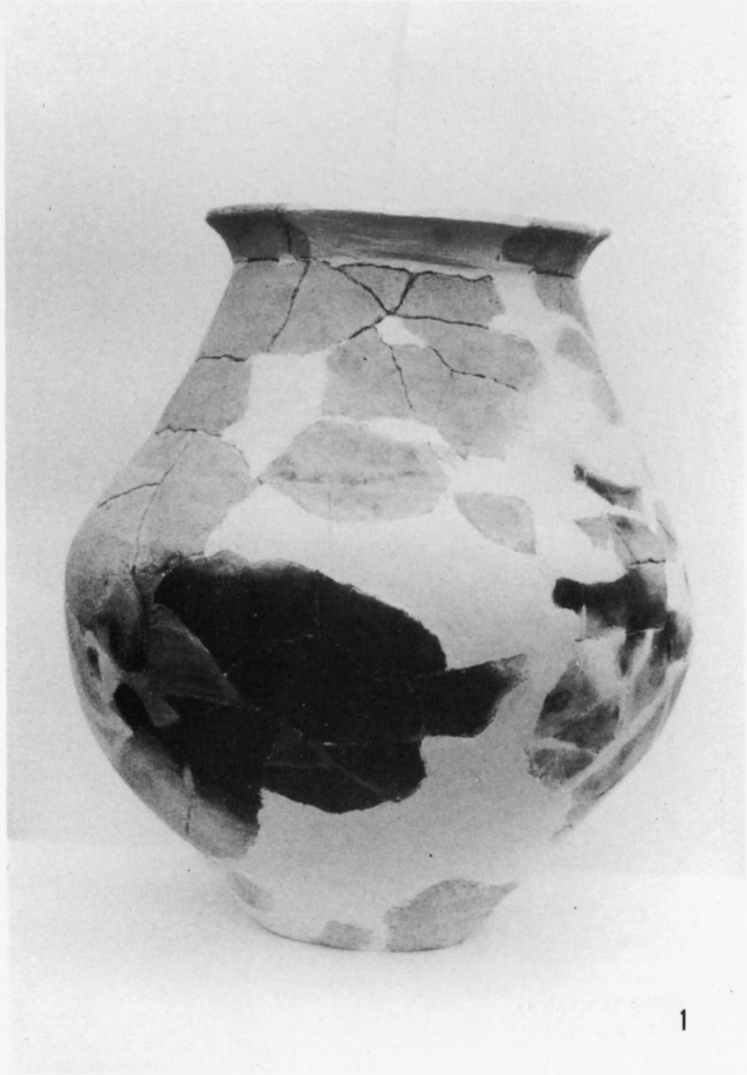
図版2　雁屋遺跡調査地全景

図版3　雁屋遺跡遺構全景

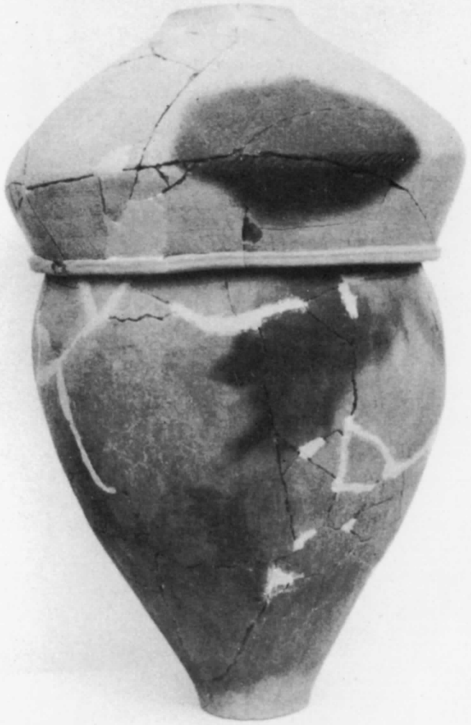
図版4　雁屋遺跡第一号甕棺検出状況

図版5　雁屋遺跡第一号甕棺検出状況

図版6　遺物写真・土器Ⅰ



1



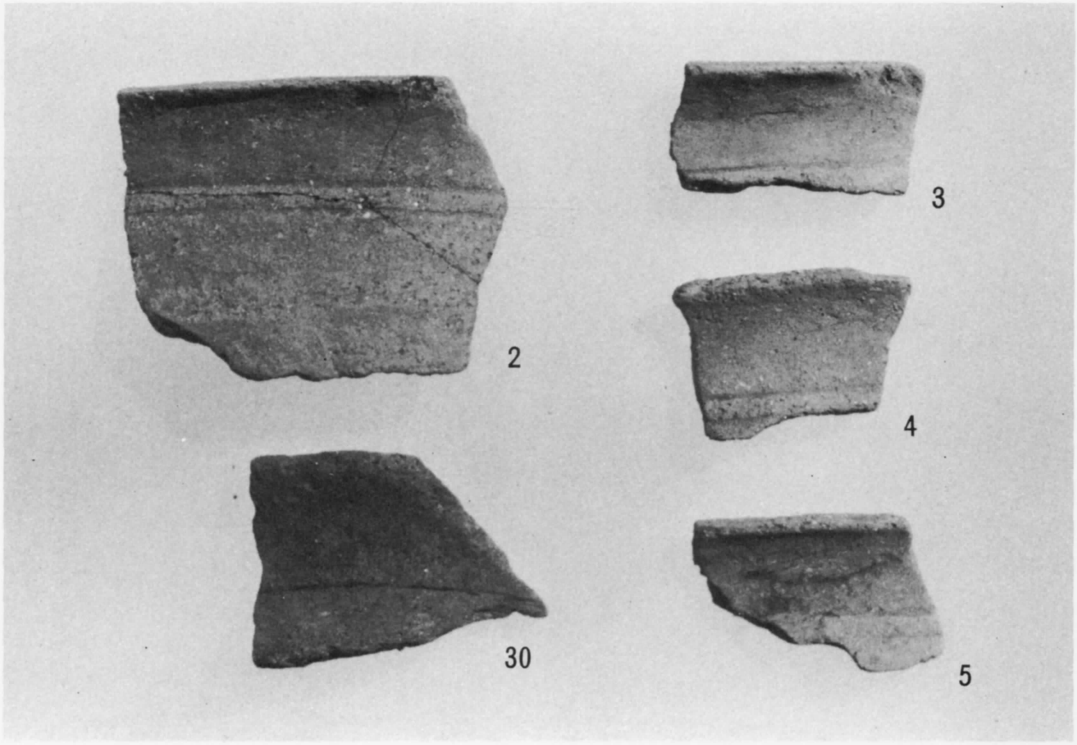
77・78

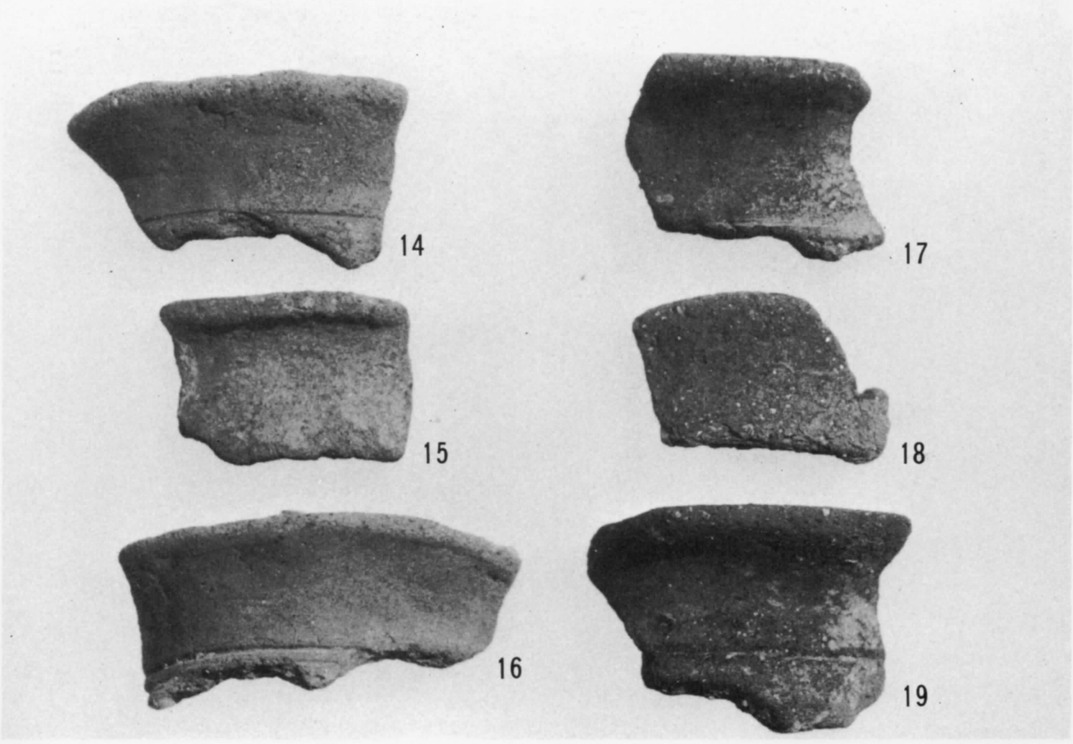
図版7　遺物写真・土器Ⅱ

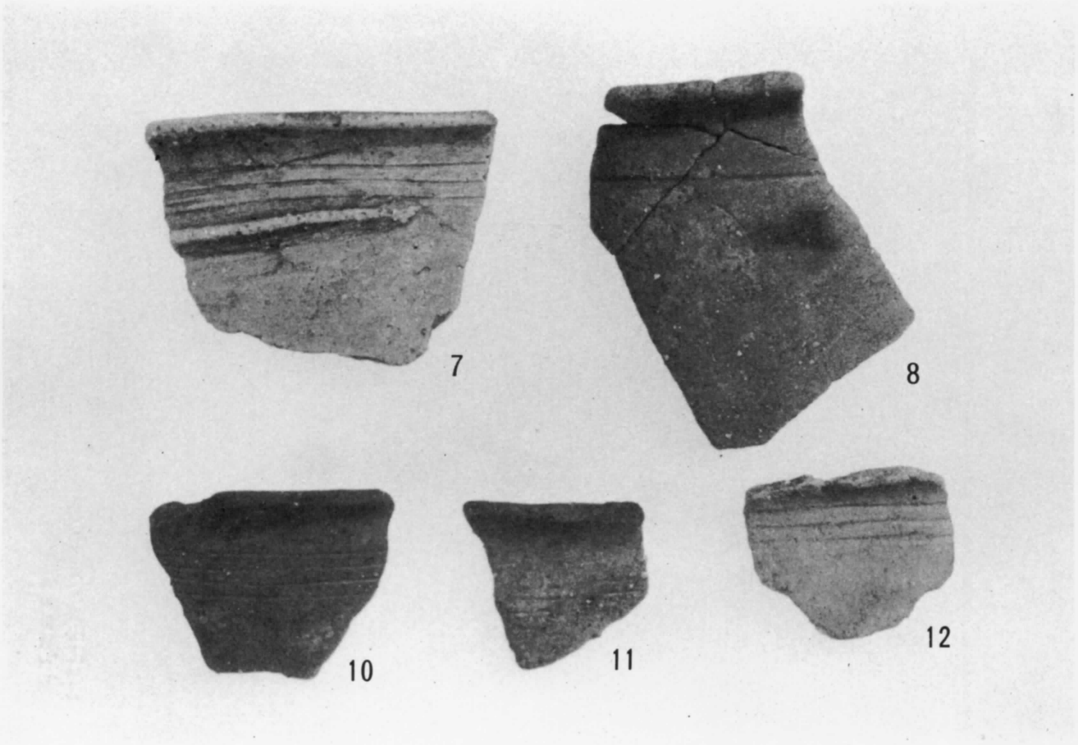
78

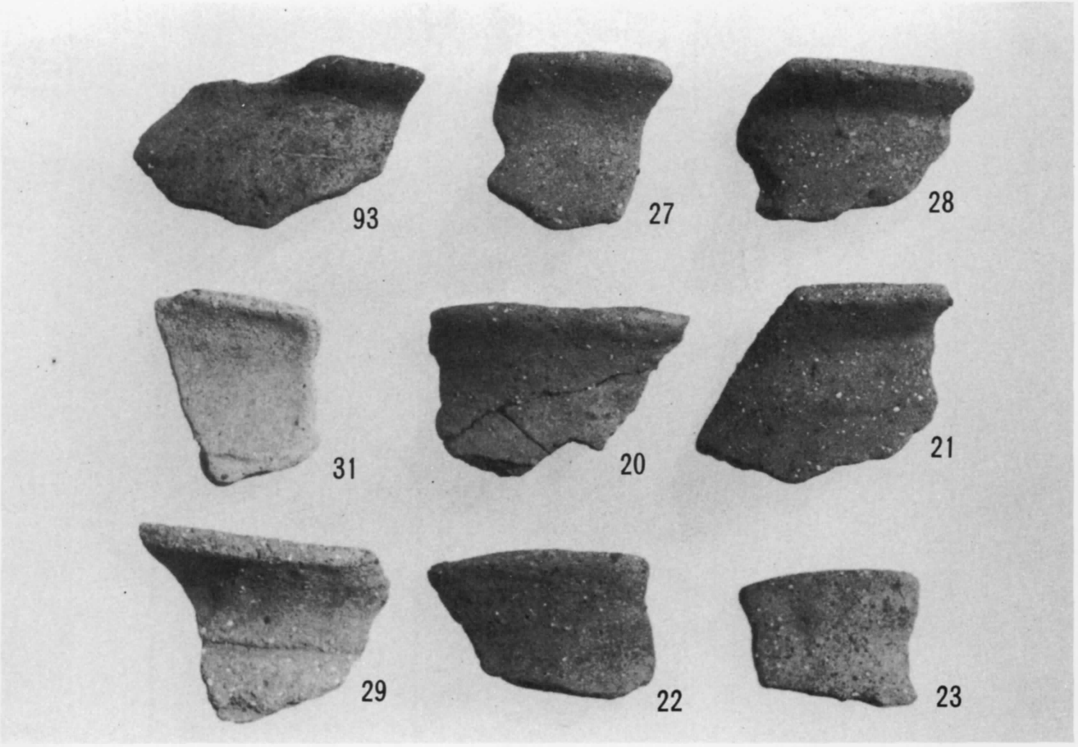
77

図版8　遺物写真・土器Ⅲ

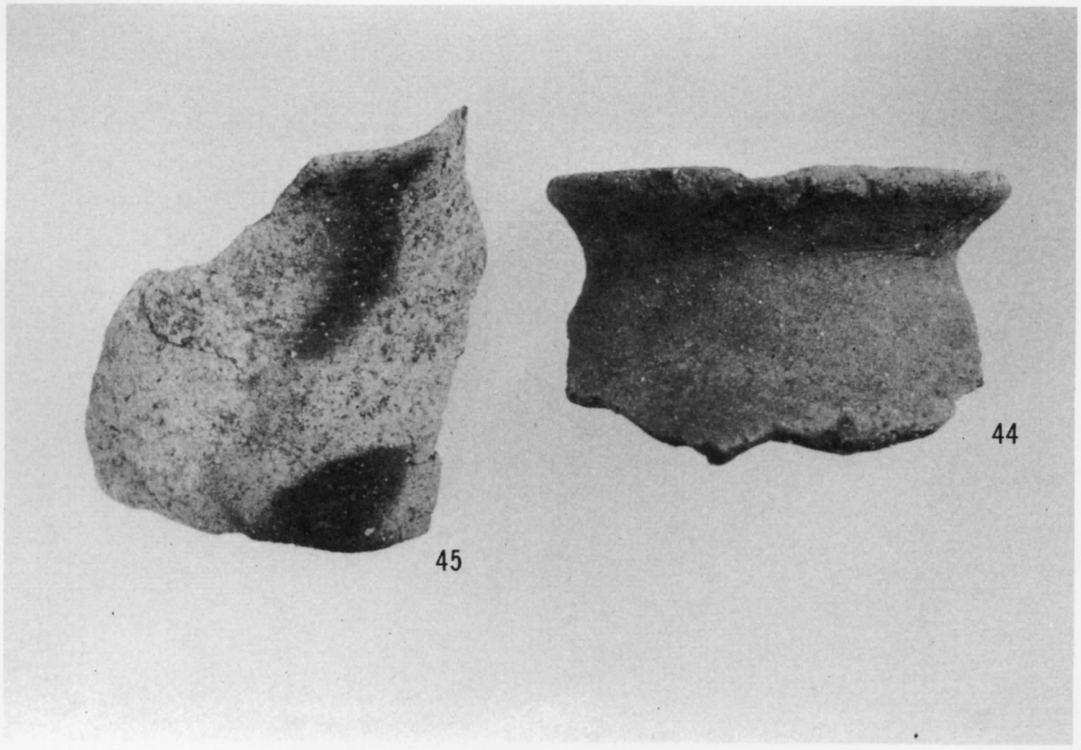


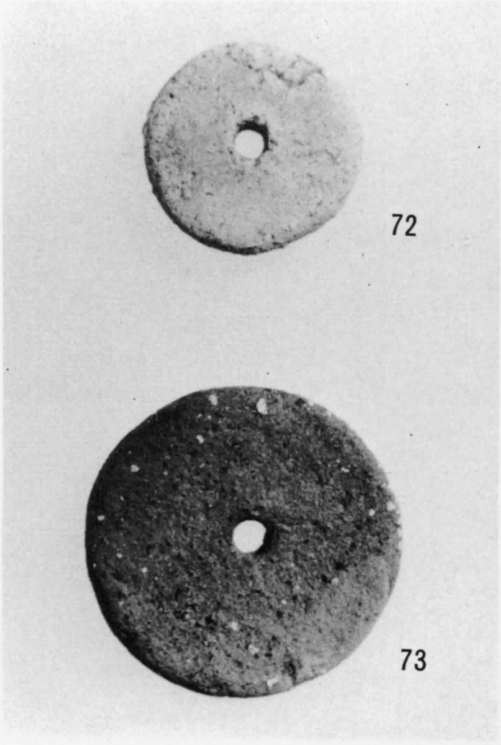



7
8
10
11
12

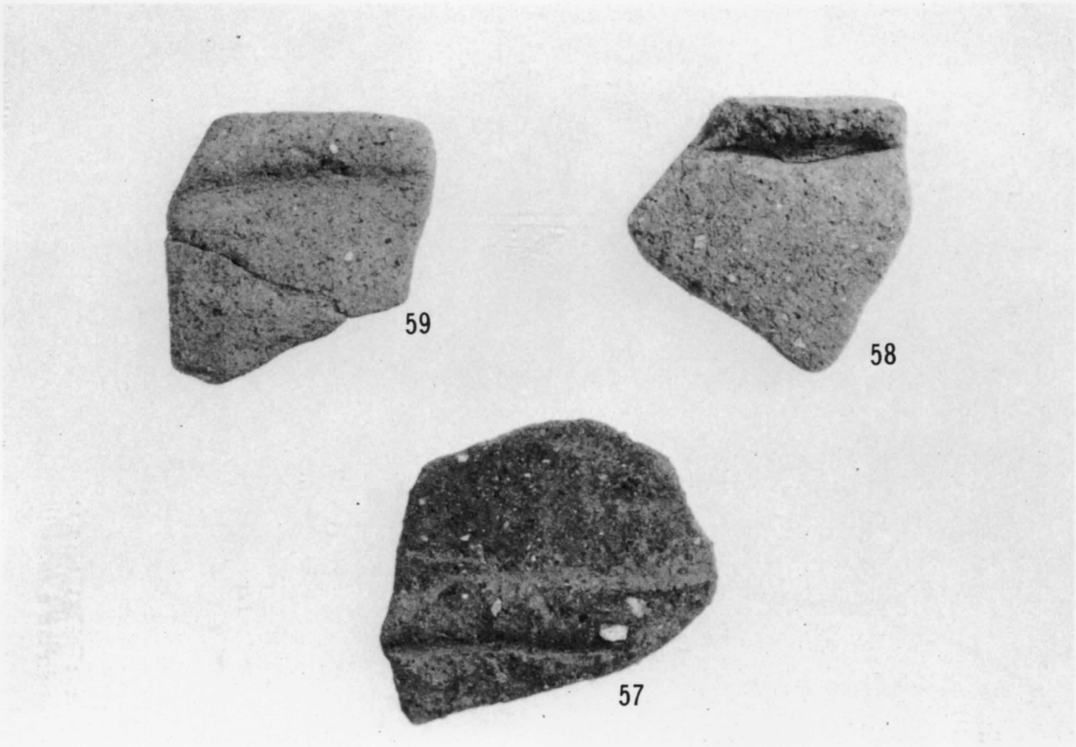

93
27
28
31
20
21
29
22
23

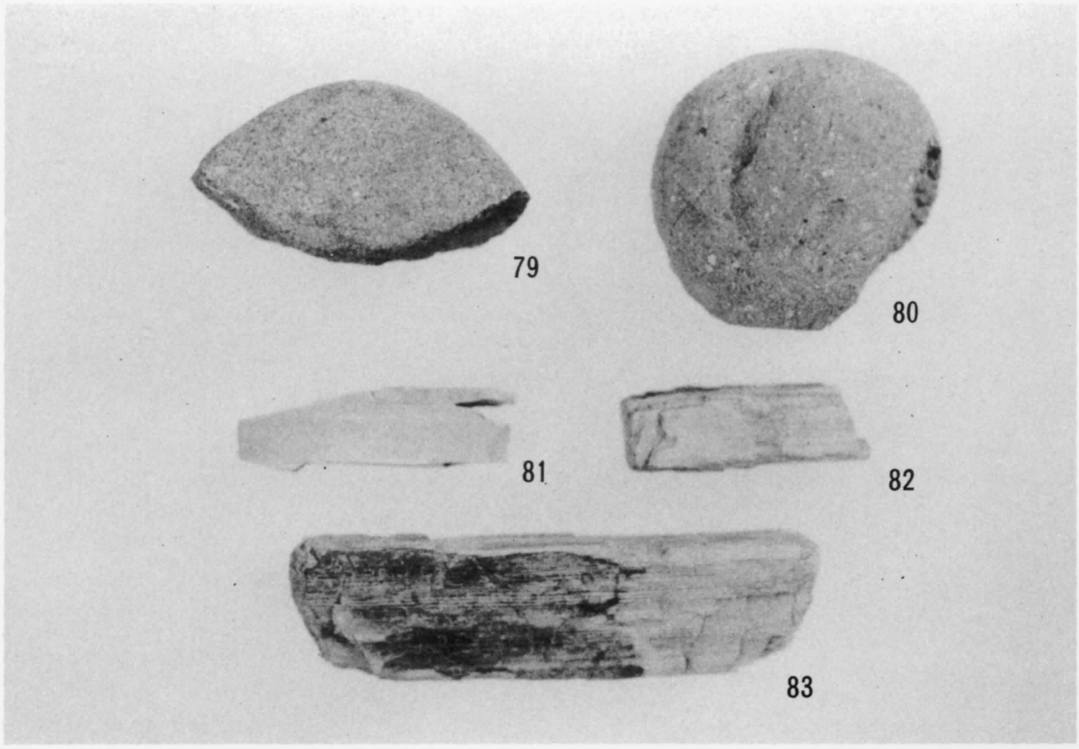
図版10　遺物写真・土器V

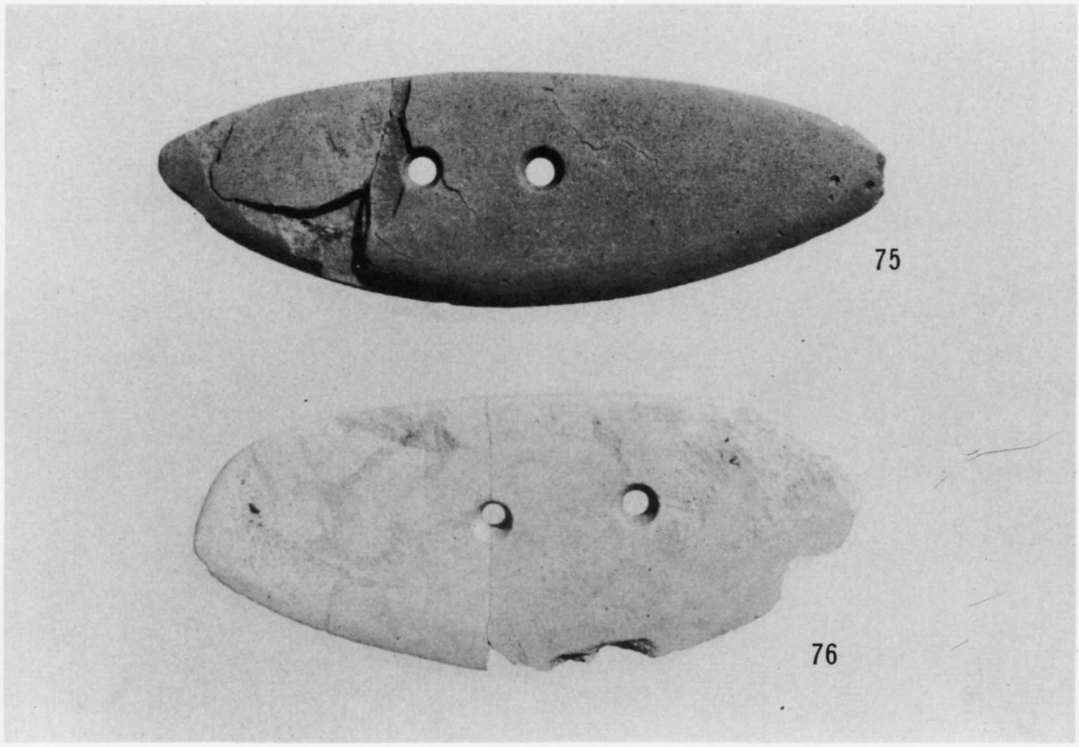


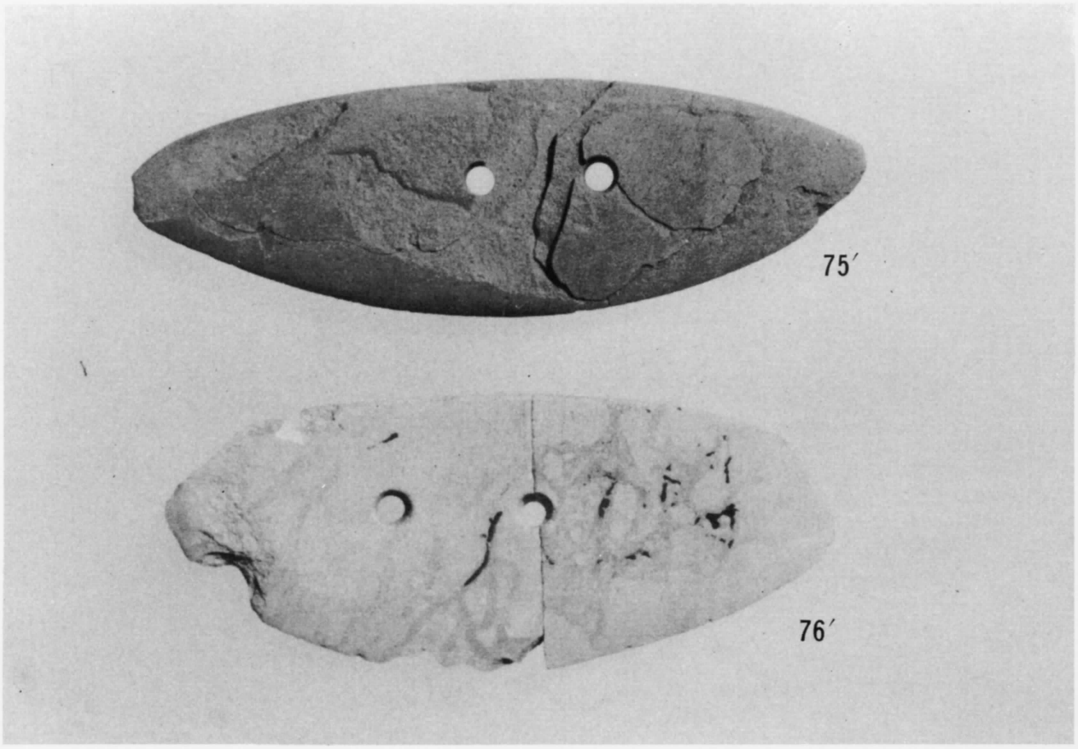


図版11　遺物写真・土器Ⅵ・石器Ⅰ

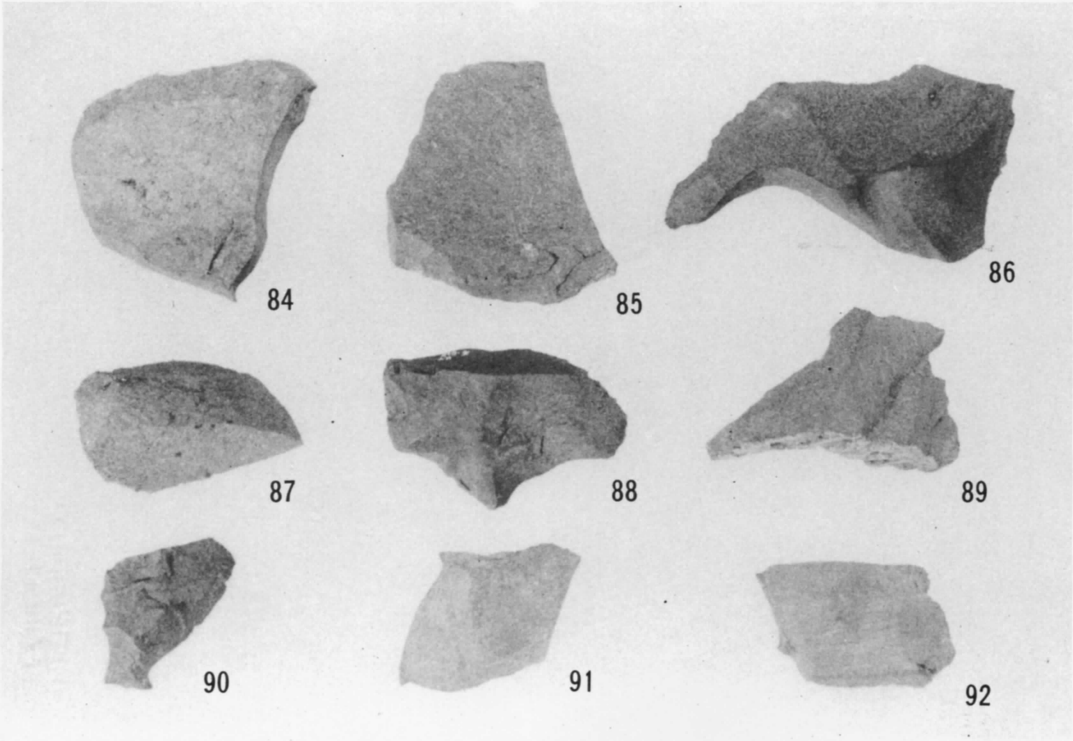


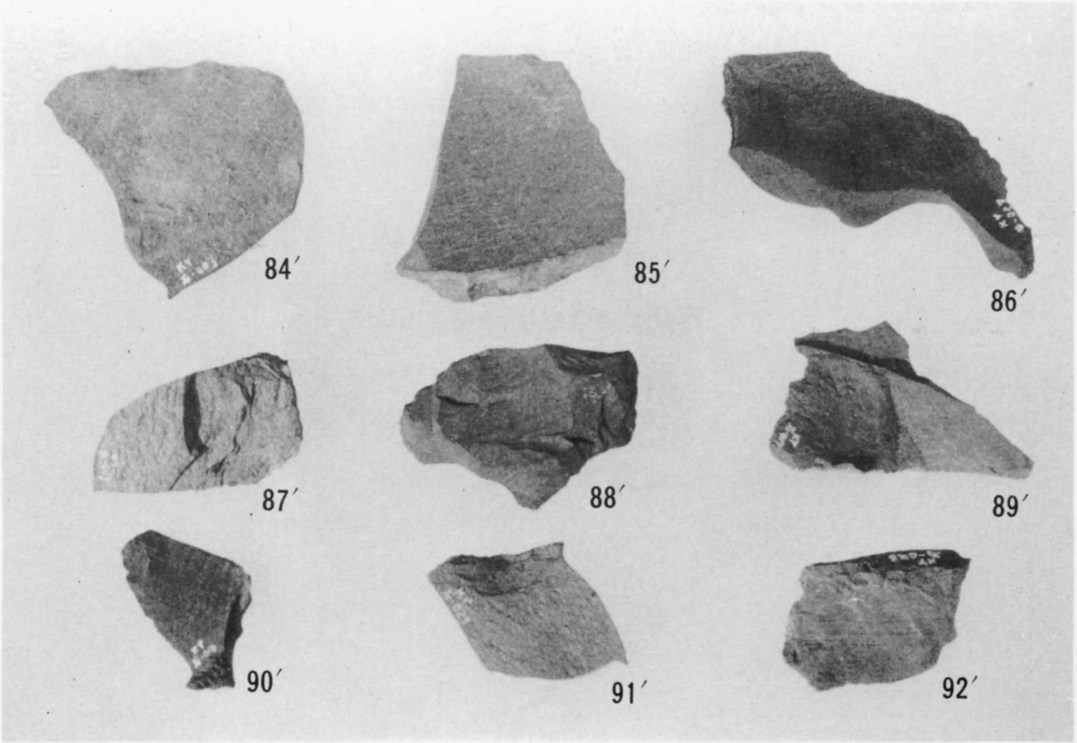



75
76


75′
76′

図版13　遺物写真・石器Ⅲ





雁屋遺跡発掘調査概要・I

―― 1983年度 ――

昭和59年3月発行

編集　四條畷市教育委員会

発行　四條畷市教育委員会

〒575　四條畷市中野本町1－1

印刷　田中耕株式会社